

Title	『論語逢原』の記念出版と中井木菟麻呂
Author(s)	竹田, 健二
Citation	中国研究集刊. 2010, 50, p. 320-333
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60872">https://doi.org/10.18910/60872</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『論語逢原』の記念出版と中井木菟麻呂

竹田健二

はじめに

明治四十三年(一九一〇)に設立された懷徳堂記念会(以下、記念会と略記する)は、翌明治四十四年(一九一一年)十月に懷徳堂記念祭を挙行するとともに、学術講演会と展覧会とを開催し、また記念出版を行った。記念出版は、三宅石庵・中井整庵・中井竹山・中井履軒・五井蘭洲の遺著など合計十種を出版したもので、出版された書籍は記念祭の式典において神饌として献げられ、また記念会の会員に記念品として配布された。

この時記念出版された書籍は、『論語逢原』を除いてすべて大阪で印刷・製本されたが、『論語逢原』だけは東京で印刷され、大阪に送られて製本されている(注1)。また出版に際して校正を担当したのは、『論語逢原』だけが大阪人文会の会員ではない中井木菟麻呂であり、他はすべ

て大阪人文会の会員が担当している(注2)。このことは従来ほとんど注目されていないが、記念出版された書籍の中で『論語逢原』だけは、他と出版に至る経緯が異なることを示していると考えられる。

記念会の活動報告書である『懷徳堂記念会記録』においては、十種十五冊の記念出版は全体としてまとめて述べられており、『論語逢原』と他の書籍との出版の経緯の違いにはまったく触れられていない(注3)。わずかにその印刷について、「印刷製本は委員松村九兵衛君之を擔當し、阿波座堀越日進堂、東京愛宕町東洋印刷株式會社に命し活版印刷に附せり」と、大阪の堀越日進堂と東京の東洋印刷とで印刷が行われたことに言及しているが、何が東京で印刷されたのかは述べられていない。

また『論語逢原』の校正は、おそらく記念会が木菟麻呂に依頼し、木菟麻呂が承諾して実現したと考えられる

が、『懷徳堂記念会記録』には各書籍の校正者の氏名が列記されているだけで、記念会の会員ではなかった木菟麻呂に校正を委ねた事情に関する記述はない。

一体なぜ『論語逢原』だけは大阪人文会の会員ではない木菟麻呂が校正を行い、そして東京で印刷されたのであろうか。小論では、懷徳堂顕彰事業において木菟麻呂の果たした役割を解明する手がかりを得るべく、『論語逢原』の記念出版の経緯について考察を加えることとする。

一

『論語逢原』の記念出版の事情を知る手がかりとして、校正を担当した木菟麻呂の日記『秋霧記』がある(注4)。

以下、『秋霧記』の中から関連する記述を抽出し、『論語逢原』出版の経緯を見てみよう。

『秋霧記』の記述によれば、実は明治四十二年の秋、つまり記念会が発足する一年前から、記念会の記念出版とはまったく無関係に、木菟麻呂は独力で『論語逢原』を出版しようと試みていた。その発端は、明治四十二年十月一日、東洋大学が発行した雑誌『東洋哲学』の中に『論語逢原』が数頁掲載され、更に次号以降『論語逢原』を連載すると予告されていたことである。このことを知

った木菟麻呂は、「無断刊行ヲ詰責シテ、次号以下ノ掲載ヲ止ム」ために、雑誌の発行元へ抗議の手紙を出した(十月二十五日付『秋霧記』)。この事件をきっかけとして、木菟麻呂は『論語逢原』など懷徳堂関係の遺書、特に履軒に関するものの出版を強く望むようになる。

近時漢文学殊ニ儒学復活ノ兆アリ。先哲遺書ノ刊行セラルトモノ少カラザルニヨリ、余モ亦東洋哲学ニ論語逢原ノ掲載ヲ始メシコト動機ト為リテ、七経逢原・七経雕題ノ類ヲ印行セント欲スル希望ヲ起コシシニヨリ、本日東陽堂ノ田中氏ノ来リシ時、語次之ニ及ビタルニ、氏モ亦其時機ヲ得タルコトヲ語リテ、予約出版ノ方法ヲモ話シ、尚「主人ニ謀ラルト所アラバ可ナラン」ト云ヘリ。(十月二十七日付『秋霧記』)

この頃「漢文学殊ニ儒学復活ノ兆」があり、先人の遺書の刊行が相次いだことから、木菟麻呂は「七経逢原・七経雕題ノ類」の出版を思い立ち、関わりがあった書店・東陽堂の田中なる人物に話を持ちかけた。すると田中は、「時機ヲ得タルコト」であるとして、主人である吾妻健三郎に直接相談するように木菟麻呂に語った。

たまたまその数日後、木菟麻呂のもとへ、或る書店(後

に昭文堂と判明)が『七経逢原』の出版を希望していることについて意見を尋ねる手紙が、知人から届いた。

二

来東 新井奥達翁

一書肆、七経逢原ヲ刊センコトヲ願スルモノアリト  
ノコトヲ述ベテ、予ノ意見ヲ問フ。予、窃ニ時機ヲ  
得タリト為ス。然ルニ、印刷装釘ノ事、皆自家ノ意  
見ヲ実行セザルベカラズ。議果シテ熟スベシヤ否ヤ。

(十一月二日付『秋霧記』)

木菟麻呂は「窃ニ時機ヲ得タリ為ス」と、遺書出版の好機が到来したのではないかと喜んだが、ここで注目されるのは、木菟麻呂にとっては出版することだけが重要だったのではないという点である。木菟麻呂は、「印刷装釘ノ事、皆自家ノ意見ヲ実行セザルベカラズ」と、印刷・装丁をその希望通りに行うことを重視していたのである。木菟麻呂の希望とは、後述するように原本の体裁にできるだけ近い形で印刷を行うことであつた。

もつとも、出版資金のない木菟麻呂に、希望通りの出版を実現させる自信はなかつた。そのことが「議果シテ熟スベシヤ否ヤ」との自問から窺える。

この後木菟麻呂は、東陽堂から『論語逢原』と『論語雕題』を出版する意向を固め、その準備を開始する。東陽堂と木菟麻呂との交渉で問題となつたのは、やはり印刷・装丁の問題と、資金の問題とであつた。

往来 午後五時招ニ応シテ東陽堂支店ニユク。主人并山下重民氏出デ接セラル。予、論語逢原并雕題原本ヲ示ス。山下氏ハ切ニ自筆ノマヽ写真石板ニ付セシテ勸メラル。略予ノ希望ト符合ス。然ニ東陽堂主人ハ莫大ノ資金ヲ要シ、且購求ノ少数ナランコトヲ述ヘテ、躊躇スル有様ナリシガ、若シ特志ノ豪商ニテモアリテ資金ヲ投シ呉レタランニハ、一挙ニシテ実行スルヲ得ベシトノ説テ、結局余ハ一応重野博士ヲ訪ヒテ岩崎氏ニ紹介ヲ求メントノコトナリタリ。主人酒膳ヲ出サレタレドモ、六時ノ翻訳時刻ニ迫リタレハ、辞シテ帰レリ。爾来逢原印行ノ事ニ傾注シテ千思万考セリ。(十一月三十日付『秋霧記』)

原本を出来る限りそのまま印刷するとなれば、当時「写真石板」の方法があり、東陽堂の主人である吾妻健三郎

はその専門家として著名だった。しかし、写真石板印刷は活版印刷と比べて経費がかさんだ。木菟麻呂には出版に必要な「莫大ノ資金」がなかったために、出版しても採算が取れなくなる危険性があり、東陽堂は「躊躇スル有様」を示したのである。

結局木菟麻呂と東陽堂とは資金問題を解決できず、「若シ特志ノ豪商ニテモアリテ資金ヲ投シ呉レタランニハ、一挙ニシテ実行スルヲ得ベシトノ説」が出て、木菟麻呂が重野安繹を頼り、三菱財閥の岩崎氏に出版資金の援助を求めるとした<sup>(注5)</sup>。しかし、この三菱に出資を求める試みは成功しなかったようである。

後日木菟麻呂は、写真石板よりも写真金属板の方がはるかに優れた印刷が可能であると聞き、その専門家に直接会って見本を見た<sup>(注6)</sup>。そして「其精巧無比ニシテ写真石板ノ如キニアラザルヲ見テ、徐ニ心ヲ動カシ、万難ヲ排シテモコノ金属写真板ヲ以テ印行シタキ望」を起こした(十二月四日付『秋霧記』)。しかし、写真金属板印刷にも当然多額の資金が必要で、結局資金問題が解決しない以上、木菟麻呂の自力による出版は実現不可能であった。

写真石板印刷や写真金属板印刷については、実は資金の他にもう一つ問題があった。それは、後述するように、

写真を撮影する際に原本の綴じ紐を解く必要があることである。撮影後は元通りに綴じ直すとしても、一旦綴じ紐を解くということは、木菟麻呂にとって原本を損なう行為であった。これまで原本の保存に努めてきた木菟麻呂としては、そうした行為は避けたかったのである。

### 三

木菟麻呂が『論語逢原』の印刷方法について結論を出したのは、十二月に入ってからである。

往来(中略)午後五時頃ヨリ東陽堂ニ之キ、主人并ニ山下重民氏ト論語逢原印行ノコトヲ謀ル。予ノ念頭ニハ、尙写真金属版・写真石板等ニヨリテ原本ノ筆蹟ヲ伝フルコトヲ断念スルニ至ラザリシガ、東陽堂主人ハ若シ広ク(一字不明)行セシムル目的ナラシニハ、活字印行ニ如カザルコトヲ説キ、更ニ進ミテ袖珍本当代謂フ所ノポッケット入ニ縮小スベシトマテ勸メタレドモ、予ハ評議條目ノ圈外ニ置キテ取リアハズ。縦ヒ真蹟ヲ伝フルコトヲ見合ストモ、製本ノ体裁等ハ及ブベキ丈原本ニ接近セシムルニアラズンバ、斯ノ議遂ニ円熟セズト断言セリ。之ヲ活字

印刷ニ付スルト、写真ヲ以テ真蹟ヲ伝フトノ二件ハ、  
帰宅後徹宵夢視ノ間ニ往来シテ安眠スル能ハズ。覺  
ムルニ及ビテ略決定スル所アリ。即真蹟ヲ伝フルコ  
トヲ変シテ、活字ヲ以テ印行スルコトナリ。但シ其  
体裁ハ必原本ニ据ルコト。(十二月十八日付『秋霧記』)

十二月十八日、木菟麻呂は東陽堂の吾妻らと相談した。

木菟麻呂は「写真金属版・写真石板等ニヨリテ原本ノ筆蹟ヲ伝フルコトヲ断念スル」ことができなかったが、吾妻は『論語逢原』を広く一般に流布させることが目的ならば活版印刷が良いと主張し、「更ニ進ミテ袖珍本当代謂フ所ノポケット入ニ縮小スベシトマテ勸メ」た。しかし、木菟麻呂はポケット版を論外だとして取り合わなかった。たとえ活版印刷するとしても、可能な限りその体裁は原本に近づけなければ意味がないと考え、「製本ノ体裁等ハ及ブベキ丈原本ニ接近セシムルニアラズンバ、斯ノ議遂ニ円熟セズ」とまで断言したのである。

写真印刷にするか、活版印刷にするかは、この日も結論が出ず、帰宅後も木菟麻呂は「安眠スル」ことができなかったが、翌朝、活版印刷することを決意し、その体裁について「必原本ニ据ルコト」、つまり可能な限り原本に近づけることを条件とした。この決断を「更ニ勘考シ

タ」結果が、翌日付の『秋霧記』に記されている。

雑事 論語逢原印行ノコトニ付、更ニ勘考シタル上、  
心中ニ決定セシコト左ノ如シ。

一 金属板或ハ石板ニヨリテ真蹟ヲ伝ヘントスル  
ニハ、書冊ノ綴合ヲ解カザルヲ得ズ。タトヒ旧  
ノ如ク綴合スルヲ得ト雖、古人ノ為シオカレタ  
ル所ヲ残フコトトナルガ故ニ、思ヒ止マラザル  
ヲ得ズ。是ヨリ技術進ミテ綴目ヲ解カズシテ写  
真ヲ取ルヲ得ルニ至ルトイヘドモ、其位置ヲ正  
スガ為ニ強ヒテ書冊ヲ圧搾スル恐アリ。如何ニ  
シテモ職工ノ手ニカトリテハ、聊旧態ヲ損ズベ  
シト思ハルレバ、真蹟ヲ伝ヘンコトハ、目今ニ  
於テモ、将来ニ於テモ、断ジテ為スベカラズ。  
但シ、序説ノトコロ丈ハ、綴目ヲ解カズシテ容  
易ニ影写スルニ得ベシト思ハルレバ、是丈ハ真  
蹟ヲ伝ヘテ原本ノ倣ヲ示スコト。

一 題簽モ影写シテ、原本ノマヽヲ伝フルコト。  
一 表紙ハ、原本ノ通ノヲ用キルコト。  
一 大サハ、原本ノ通ニスルコト。  
一 九行ノ立罫ヲ入ルヽコト。原本ノ通。  
一 本文ハ二号活字、注ハ四号活字タルベキコト。

- 一 用紙ハ改良唐紙、又ハロール紙ヲ用ヰルコト。
- 一 四冊帙入ノコト。

右之通。(注) (十二月十九日付『秋霧記』)

写真出版を行うため「書冊ノ綴合ヲ解」くことや、撮影位置を固定するため「強ヒテ書冊ヲ圧搾スル」、つまり冊子に圧力を加えることは、原本の「旧態ヲ損ズ」る危険性が高いので「真蹟ヲ伝ヘンコトハ、目今ニ於テモ、将来ニ於テモ、断シテ為スベカラズ」と、木菟麻呂は写真印刷による出版を断念した。但し、序説の部分だけは「綴目ヲ解カズシテ容易ニ影写スル」ことができそうなので、ここだけは「真蹟ヲ伝ヘテ原本ノ佛ヲ示ス」こととした。また、題簽や表紙、版の大きさや行数、罫線に至るまで細かな注文を付け、可能な限り「原本ノ通」りになるように印刷することとしたのである。

こうして『論語逢原』の出版に関する基本方針を定めた木菟麻呂は、翌明治四十三年一月十七日、東陽堂に対して改めて出版への協力を要請した。

夜、東陽堂支店ニ吾妻翁ヲ訪フ。山下重民氏モ亦アリ。吾妻翁善ク語ル。談笑時ヲ移ス。予昭文堂ノ意向何如ニカ、ハラズ、印行ノ事ヲ担当致シ呉レラル

ゝヤ否ヲ問ヘリ。吾妻翁ハ「カナラズ何如ニカ法ヲ立ツベキニヨリ、先青写真ヲ以テ論語逢原ヲ影写スルコトヲ始メラルベシ。予ハソノ写真法ヲ伝授スベク、先ヅ近日都合ヨキ日ヲ申遣ハサル、ナラバ、工ヲ遣シテ試ニ影写セシムベシ」ト云ヘリ。即電話ヲ以テ日時ヲ報ゼンコトヲ約シテ帰レリ。(明治四十三年一月十七日付『秋霧記』)

木菟麻呂の依頼に対して東陽堂の吾妻は、「カナラズ何如ニカ法ヲ立」てることのできるであろうから、先ず『論語逢原』の青写真を撮影するようにと木菟麻呂に勧めた。こうして、木菟麻呂は青写真法を習得することとなった。その一回目の撮影は、明治四十三年一月二十日、東陽堂から木菟麻呂のもとへ技術者が派遣されて行われ、以後木菟麻呂は連日撮影に取り組んだ。

#### 四

懷徳堂記念祭の挙行が実現に向けて動き出すのは、大阪人文会の第二次例会において、西村天囚が「懷徳堂研究其の一 五井蘭洲」と題する講演を行い、その後懷徳堂記念祭の挙行が全会一致で決議されたことであつた。

この例会が開催された明治四十三年一月二十九日は、ちょうど木菟麻呂が青写真法の習得に励んでいた頃である。

大阪人文会の決議を受けて、西村天囚は二月二十八日に上京し、木菟麻呂と面談した。『秋霧記』によれば、この面談の際、二人は記念祭挙行の計画と懷徳堂記念室に關して意見を交わしているが、記念出版や展覧会の話はしていない。この時はまだ記念出版を行うこと自体が固まっていなかったと考えられる(注三)。

この後も木菟麻呂は、『論語逢原』の出版を目指し、継続して東陽堂と準備を進めていた。明治四十三年十一月二十日付『秋霧記』によれば、この日吾妻は木菟麻呂に体裁に関する希望を質問し、適当な活字のサイズを相談している。結局、「座上ノ論」だけでは判断出来ないため、「一応二・三頁ヲ試製シタル上、更ニ評議ニ及」ぶこととなった。

状況が大きく変化したのは、その翌日の十一月二十一日である。この日、木菟麻呂のもとに天囚から「論語逢原之件」を伝える手紙が届いた。残念ながら、その手紙の内容について『秋霧記』には記されていないが、記念会が『論語逢原』の記念出版を計画しているということをも木菟麻呂に通知し、同時にその事業への協力を木菟麻呂に求め、かつ詳細を協議するため木菟麻呂に來阪を要

請するものであったと推測される。

現在財団法人懷徳堂記念会には、「懷徳堂記念祭趣旨」に「懷徳堂記念会会則」を添えた小冊子が保存されている。記念会が入会勧誘に用いたと見られるこの小冊子の「備考」には、「記念出版物ハ論孟首章講義、五孝子伝(以上国文) 喪祭私説、蘭洲遺稿漢文勢語通(国文) 奠陰集(漢文) 竹山尺牘(国文) 論語逢原及ビ敝帚(漢文) 等ノ内ニ於テ撰採印行ノ予定」とある。何を記念出版するかについては、記念会発足前に大阪人文会が予め検討していたと見られるが、記念会の発足後『論語逢原』の記念出版が正式に決定され、十一月下旬に木菟麻呂に対する通知と協力要請がなされたと考えられる。

木菟麻呂は十一月末から大阪へ出かけているが、記念会が何故『論語逢原』の校正を木菟麻呂に依頼したのか、或いは大阪でどのような協議が行われたのかについては、分からない。あくまでも推測だが、天囚は木菟麻呂から『論語逢原』の出版準備を進めていることと、資金の問題から出版が実現していないことを聞き及んでおり、木菟麻呂の力を借りれば『論語逢原』の記念出版が支障なく実現できると判断し、木菟麻呂に協力を要請したのではないかと思われる。

興味深いのは、『秋霧記』によれば、木菟麻呂は十一月



に天囚からの手紙を受け取り、大阪で記念会と協議を行った後も、東陽堂と『論語逢原』の試し刷りの話を継続している点である。『論語逢原』の記念出版をめぐる記念会との話が、なかなか決着がつかなかったためであろう。決着がついたのは、明治四十四年の三月二十四日になってからであると考えられる。

西村時彦君の書到る。

論語逢原をこの方にて印刷することゝなりたれば、大阪にて写したるをおこせたまふこと。(後略)(明治四十四年三月二十四日付『秋霧記』)

この時木菟麻呂が受け取った天囚の手紙は、記念会が出した結論を木菟麻呂に通知するものだったと考えられる。すなわち、『論語逢原』の印刷を「この方」、つまり東京において行うことに決定したので、大阪府立図書館が所蔵する三村昆山のテキストを「大阪にて写し」たものを木菟麻呂に送る、と天囚は木菟麻呂に通知してきたのである。これにより、木菟麻呂はその送られてくる写本に訓点を施して、記念刊行する『論語逢原』の原稿を完成させることとなった。

この『秋霧記』の記述から判断するに、明治四十三年

十一月に天囚から「論語逢原之件」を伝える手紙が届いて以降、四ヶ月余りも『論語逢原』の記念出版の話がまとまらなかったのは、「この方にて印刷する」のかどうか、つまり東京で印刷するか、大阪で印刷するかが記念会内部で問題となっていたためと見られる。

大阪の天囚や記念会の側からすれば、記念出版する書籍の一部のみをわざわざ東京で印刷しなければならぬ理由はない。従って、東京での印刷は、木菟麻呂が記念会に要求したことであり、記念会から『論語逢原』の記念出版への協力を要請された木菟麻呂が、その要請を承諾するに当たった条件として、東陽堂で印刷することを記念会に要求したものと推測される<sup>(注)</sup>。

木菟麻呂が東陽堂での印刷を求めた理由には、以下の二つが考えられる。一つは、印刷の体裁の問題である。前述の通り、『論語逢原』の出版にあたり木菟麻呂が重視したのは、原本の体裁に近い形で印刷を行うことであった。『論語逢原』の印刷が大阪で行われた場合、東京から木菟麻呂が細かな指示を出しても、その指示通りの印刷となる可能性は低い。しかし、東陽堂で印刷されるならば、東陽堂は既に木菟麻呂の希望を十分承知し、また原本の体裁も理解しているため、希望通りの印刷となる可能性が高い。このように木菟麻呂は判断し、記念会に

東陽堂での印刷を強く求めたのであろう。

もう一つの理由は、木菟麻呂の『論語逢原』出版計画に大いに協力してきた東陽堂に対して、木菟麻呂が強く恩義を感じていたことである。明治四十二年の秋以来、木菟麻呂から話を持ちかけられた東陽堂は、印刷方法や資金の工面などのさまざまな相談に応じ、試し刷りに至るまで継続して木菟麻呂に協力してきた。記念会の事業として『論語逢原』が大阪で印刷されることとなれば、そうした東陽堂の努力と誠意とが無に帰してしまうこととなる。木菟麻呂にはそれが忍びなかった。

もちろん木菟麻呂にしてみれば、資金問題を自力では解決できない以上、記念会による記念出版は『論語逢原』を出版する絶好の機会であった。原本の体裁を尊重した出版や恩義にこだわって東陽堂での印刷を記念会に求めた結果、記念会が木菟麻呂の要求を拒否すれば、『論語逢原』出版の機会が失われてしまう。木菟麻呂は、おそらくそうした結果になることも覚悟した上で、東陽堂での印刷を記念会に求めたものと推測される<sup>(注10)</sup>。

記念会にすれば、『論語逢原』を記念出版すること自体、木菟麻呂の協力を前提としていたと見られるが、木菟麻呂の条件を受け入れて『論語逢原』だけを特別扱いするのは、かなり難しいことであつたに違いない。木菟麻呂

の要求を拒絶することも考えられたであろうが、そうなれば今度は『論語逢原』の記念出版が実現しないということになり、記念出版の企画として大きな損失となる。記念会としては対応が非常に難しい問題であつた。

結局記念会は、木菟麻呂の条件を受け入れることを選択した。『論語』が著大な漢籍であるだけに、懷徳堂の学問的業績を世に広めるための記念出版として、懷徳堂の学者の『論語』の注釈書を是非入れておきたかったためと推測される。

『秋霧記』によれば、明治四十四年三月二十五日、大阪で筆写された『論語逢原』四冊が天囚から木菟麻呂に届けられた。木菟麻呂は『秋霧記』に、「喜不過之」（喜び之に過ぎず）と、その喜びを記している。

## 五

その後『論語逢原』の記念出版の準備は順調に進んだが、明治四十四年八月二日、懷徳堂記念祭の挙行まであと二ヶ月という段階に至って、にわかに問題が生じた。印刷の体裁の問題と、予算の問題とである。

午前、論語逢原ニ施点ス。朝、西村氏ヨリ書状并ニ

已印奠陰集一卷ヲ見本トシテ遣サレ、又大阪記念出版物ノ見積ヲ遣サレタリ。此ニヨレバ、植字代ニ甚シキ相違アリ。又見本モ意ニ滿タザル所アリ。論語ト一様ニスルヲ得ズ。此等ノ為ニ一頓挫ヲ致セリ。  
(下略)(八月二日付『秋霧記』)

『論語逢原』の写本に訓点を施す作業に取り組み、記念出版の原稿を作成していた木菟麻呂のもとに、天囚から記念出版の見本として『奠陰集』第一巻が届けられ、またあわせて大阪で印刷される記念出版物の見積り金額が伝えられた。すると「植字代」、つまり印刷費の見積額が、東陽堂の試算とは「甚シキ相違」があり、また見本の体裁も木菟麻呂の「意ニ滿タザル所」があった。このため『論語逢原』の出版は、体裁と経費という二つの問題で「一頓挫ヲ致」してしまつた、というのである。

木菟麻呂は直ちに東陽堂と相談したが、東陽堂は記念会の提示した金額は余りに少なく、とても引き受けることができないと判断し、その額で出版を請け負う印刷所が東京にあるかどうかを調べた上で、改めて木菟麻呂に返事をする事となつた。

この後も木菟麻呂は『論語逢原』に訓点を施して原稿を作成する作業を継続しつつ、東陽堂と協議を重ねた。

論語逢原副墨。○午後、東陽堂田中氏来リテ、論語逢原印費ノ事ヲ謀ル。蓋、諸処ノ活版所ニ見ツモラセタレドモ、大差ナケレバ、此ノ上ハ他ニ良法ナキ故、寧大阪活版所ニ委託アリタル方然ルベシトノコトナレドモ、コレニテハ前議ヲ破壊スルコトナリテ、深く遺憾ニ思ヘバ、過超ノ印費ヲ大阪記念会ト東陽堂トニテ分担スルヤウ致シクレズヤ、然ル上ハ今ハ独断ニテ定メオキ、大阪ニ申送リテ承諾セシムルコトヲ為スベシト云ヒ、試ミタレバ、尚主人ニ話シクレ、トノコトナレバ、同道ニテ本店ニユキ、主人ニ此ノ議ヲ述ベテ承諾ヲ乞ヒタルニ、後來ノ収益ヲ見コミテ左様ニ為スベシトノコトニテ決定セリ。  
(八月五日付『秋霧記』)

東陽堂の田中は、記念会が提示した額で印刷を請け負う業者を探したが見あたらず、「此ノ上ハ他ニ良法」がないので、東京での印刷を断念して大阪で印刷してはどうかと提案した。これに対して木菟麻呂は、それでは記念会との間で定めた「前議ヲ破壊スルコト」になり「深く遺憾」であるので、「過超ノ印費ヲ大阪記念会ト東陽堂トニテ分担」してはどうかとの新たな提案を行った。但し、

木菟麻呂はこのことを当面記念会には伝えず、「独断ニテ」決めておいて、後日記念会に通知して「承諾セシムルコト」としようとしたのである。田中は、主人の吾妻に相談するように木菟麻呂に求めた。

そこで木菟麻呂が、吾妻に直接提案を説明して承諾を求めたところ、吾妻は「後來ノ収益ヲ見コミテ」、提案を受け入れることを決定した。「後來ノ収益」というのが何を指すのかはよく分からないが、後日記念出版とは別に『論語逢原』を東陽堂で刊行することを指している可能性が考えられる。

この後、木菟麻呂は『論語逢原』に訓点を施して原稿を作成する作業を八月十六日に終了した。完成分の原稿は既に印刷に回っており、翌日からその校正作業が始まっている。

こうして『論語逢原』の記念出版は、印刷者が東陽堂の吾妻健三郎、印刷所が東京の東洋印刷株式会社(注1)、製本所は大阪の堀越日進堂という形で無事に行われた。

## 六

以上、『秋霧記』の記述に基づき、『論語逢原』の記念出版に至った経緯を見てきた。

その結果、明治四十三年十一月の時点で、記念会が『論語逢原』の記念出版を木菟麻呂に打診し、協力を要請したこと、これに対して木菟麻呂は、その要請を受け入れる条件として東京の東陽堂での印刷を要求したこと、そしてその要求によつて、『論語逢原』の印刷を東京でするかどうかが大問題となり、四ヶ月あまりも決着がつかなかったことなどが明らかとなった。

『論語逢原』の出版の経緯にはなお不明な点も少なくないが、ここから懷徳堂顕彰事業における記念会と木菟麻呂との関係について、次のことを指摘できよう。

先ず第一に、木菟麻呂は、天囚や記念会から懷徳堂顕彰に関わる活動への協力が要請された場合、言われるがままにそれを受け入れて協力するばかりではなく、記念会に対して強く主張することもあった、ということである。木菟麻呂は天囚からの依頼を受けて、『懷徳堂考』下巻の材料となる『懷徳堂水哉館先哲遺事』を執筆している。他にも、展覧会に遺書・遺物を提供するなど、記念会の事業に対しては積極的に協力している。しかし、木菟麻呂は何でも求められるがまま黙々と依頼に応じていた訳ではなかったのである。

もちろん、木菟麻呂は、記念会に対して自ら『論語逢原』の記念出版を持ちかけた訳ではない。しかし、資金

難から実現していなかった『論語逢原』の出版を、記念会が持ちかけてきた記念出版によって実現しようとしたことは確かである。木菟麻呂は、或る意味で記念会を利用しようとしていた面があったといえる。

こうした木菟麻呂の姿勢は、殊更に理不尽なものであったという訳ではない。東陽堂での印刷に執着したのも、専ら『論語逢原』を原本に忠実な形で出版したいがためであり、そこには世俗的な意味での個人的利益を計る意図はまったくなかったと考えられる。

もつとも、だからといって木菟麻呂が、世事に疎い人物だったという訳でもないように思われる。特に明治四十四年の八月、出版経費の見積もりの問題で出版が「頓挫」した際、木菟麻呂が超過分の経費を東陽堂と記念会とで負担することを、記念会の判断を確認せずに「独断ニテ」決め、記念会に事後承諾を求めようとした点からは、木菟麻呂のしたたかさが窺える。十月の懷徳堂記念祭まで時間がなく、この提案を記念会は受け入れざるを得ないと木菟麻呂は計算したと推測されるのである。

第二に、『論語逢原』の記念出版への協力を記念会から要請された木菟麻呂が、要請を受け入れる条件として東陽堂での印刷を要求したことは、記念会の側に強い反感を引き起こし、結果的に以後の両者の関係にかなり悪い

影響をもたらしたと考えられるということである。

基本的に記念会や天囚は、記念会からの要請に木菟麻呂は自ら進んで協力するものと期待しており、その木菟麻呂から協力と引き替えに条件が提示されるといった事態はまったく予測していなかったと見られる。おそらく記念会側は、条件を出した木菟麻呂の真意をはかりかね、何か他意があるのではないかと疑ったに違いない。

記念会関係者に木菟麻呂の意図が正確に理解されたかどうかは定かではないが、木菟麻呂の要求は、中井家の当主として記念会の活動に強く干渉する姿勢を示したものと受け止められた可能性が高い。このため記念会関係者は、最終的に木菟麻呂の要求は受け入れたものの、木菟麻呂に対する反感を抱き、以後強く警戒するようになったものと思われる。『論語逢原』の記念出版は、両者の間に確執を生じさせた出来事となったと考えられるのである。

#### おわりに

記念会と木菟麻呂との関係についてはなお不明な点が多いが、木菟麻呂の日記である『秋霧記』を見る限り、おそらく『論語逢原』の出版が両者の間に確執を生んだ

最初の事件だったと考えられる。

記念会の中心人物であった天因は、「懷徳堂は浪華の公学にして、一家の私塾に非ず」という認識を有していた。

このため記念会にはかなり早い段階から、木菟麻呂との間に意図的に距離を置こうとする姿勢があったと思われる(注3)。しかし、例えば記念会の事業である展覧会には、木菟麻呂の協力が不可欠であった。記念会は、一方で木菟麻呂に協力を求めつつ、同時に一方で木菟麻呂との間に距離を置こうとするという、矛盾した態度で木菟麻呂と接したのであるから、『論語逢原』の出版以外にも両者の間に問題が生じていたとしても、無理からぬことであったと思われる。こうした点の解明については、今後の課題としたい。

## 注

(1) 記念出版された書籍の奥付によれば、『論語逢原』以外はすべて、編集兼発行者は「懷徳堂記念会代表者」の西村時彦(天因)、印刷者は「大阪市西区阿波座」の堀越日進堂、印刷製本所は同じく「大阪市西区阿波座」の堀越日進堂、発行所は「大阪市南区心斎橋筋」の松村文海堂である。『論語逢原』も編集兼発行者と発行所は同じだが、印刷者は「東京

市神田区通新石町」の吾妻健三郎、印刷所は「東京市芝区愛宕町」の東洋印刷株式会社、製本所は「大阪市西区阿波座」の堀越日進堂となっている。

(2) 記念出版の校正を担当したのは、懷徳堂五種(『論孟首章講義』・『五孝子伝』・『富貴村良農事状』・『蒙養篇』・『貞婦さんの記録』)は上松寅三、『奠陰集』の詩の部は磯野於菟介、『奠陰集』の文の部と『竹山国字牘』は木崎愛吉、『勢語通』は柳安次郎、『蘭洲茗話』は大道弘雄で、『論語逢原』以外は全員大阪人文会の会員である。

(3) 『懷徳堂記念会記録』については、拙稿「資料紹介 懷徳堂記念会所蔵『懷徳堂記念会記録』」(『国語教育論叢』第十七号、二〇〇八年二月)参照。

(4) 『秋霧記』は、現在大阪大学附属図書館・懷徳堂文庫の新田文庫に収蔵されている。なお『秋霧記』からの引用に際しては、漢字の字体を通行のものに改め、適宜句読点を加えた。

(5) 明治四十一年六月二十三日、木菟麻呂は中井繁庵・竹山・蕉園の三人を祭る式典挙行を大阪で行いたいとの希望を重野に相談している。この時重野は、木菟麻呂の計画に賛同して教え子の西村天因を紹介し、同年八月十三日、木菟麻呂と天因との面談が実現した。この面談こそ、天因が懷徳堂顕彰運動に携わる直接のきっかけである。

(6) 『秋霧記』によれば、明治四十二年十二月三日、木菟麻呂は国学者の小杉楡邨から、写真金属板印刷の専門家である七條愷を紹介されている。

(7) この時木菟麻呂は、『論語雕題略』を同時に刊行することも希望し、その印刷の方針についても『秋霧記』に記している。しかし、その後『論語雕題略』出版の具体的な話は『秋霧記』には記されておらず、進展しなかったようである。

(8) 記念会の設立を準備した大阪人文会は、明治四十三年三月二十二日の第三次例会において、懷徳堂記念祭の挙行に合わせて二日間の学術講演会を開催すること、懷徳堂諸先哲の遺著・遺墨・遺物の展覧会を開催すること、懷徳堂諸注3前掲拙稿「資料紹介 懷徳堂記念会所蔵「懷徳堂記念会記録」参照。

(9) 後述するように、明治四十四年八月五日付の『秋霧記』には、記念会と木菟麻呂との間で『論語逢原』の出版を東京で行うとの「前議」があったとする記述がある。

(10) 明治四十三年十一月に天囚から「論語逢原之件」を伝える手紙を受け取り、大阪で記念会と協議を行った後、なお木菟麻呂が東陽堂と『論語逢原』の試し刷りの話を進めていたのも、そうした覚悟があったからこそであろう。

(11) 東洋印刷株式会社については未確認である。『論語逢原』の奥付によれば、所在地は東京市芝区愛宕町三丁目二番地である。東洋印刷株式会社は東陽堂の斡旋によって印刷を請け負ったと見られるが、記念会の見積額を超過した分の経費負担が結局どういう形で決着したのかは不明である。

(12) 松山直蔵が記した再刊本『懷徳堂考』の序文(大正十四年(一九二五)九月)に引用されている、天囚の言葉による。同様の表現は、明治四十三年(一九一〇)一月の大阪人文会第二次例会においてなされた議決の中の文言として、再刊本『懷徳堂考』に収められている。「懷徳堂復興小史」などにも見られる。